

2026 年度 5 月泉の会 直子先生のお話

——「いい子」を求めることの落とし穴？！ アサーションを目指すには……——

今回は、先日ホームページのリニューアルに関してワークショップを行った際のエピソードからお話したいと思います。ある保護者の方が以前に他の幼稚園を見学した時「うちの幼稚園ではいい子を育てます」という説明を聞いて、「いい子ってどんな子なんだろう？」と疑問を思われたというのです。

一般的に「いい子」というと、優しい子・落ち着いている子・ケンカをしない子・大人の言うことを聞ける子などを思い浮かべますよね。わたし自身は、小さい頃から「いい子だね」と褒めてもらいながら育ちました。それによって、自己肯定感が生まれ、「わたしはいい子なんだ」と素直に思っていたのですが、中学生くらいになった時に、「いい子なのに、どうして嫌いな子がいるんだろう」「本当は嫉妬したり、嫌な気持ちもあるのに」と、自分のイメージと現実とのギャップに戸惑うようになりました。また、息子に対しても「いい子だね！」「すごいね！」と感動をもって褒めて育てたのですが、その息子自身は自分を丸ごと受け入れたことによって、自分の感情と周りの人の感情は同じなのかと錯覚し、高校生くらいになって、そのギャップに戸惑い葛藤しました。

わたしは、「いい子」という言葉そのものはわかりやすい褒め言葉だと考えています。「あなたはそのまま大切な存在だよ」とう気持ちで使うなら、とても温かい言葉。でもそれが、「こういう姿がいい子」「こうしないといい子じゃない」という“評価基準”になってしまうと危険です。こどもは、「ママはこういう子しか受け入れてくれないんだ」と感じると、本当の感情を押し込めてしまうことがある…器用な子ほど、“評価基準”としての「いい子」に合わせようとして、自分の気持ちに気づけなくなり、後になって、「なんだか苦しい」「本当の自分がわからない」ということにもつながっていくのだと思います。

そこでご紹介したいのが、「アサーション」という考え方です。アサーションというのは、自分の気持ちに気づき、相手の気持ちも尊重しながら、自分の考えをきちんと伝える力のこと。ただ我慢するわけでもなく、ただ強く主張するわけでもなく、「自分も相手も大切に自己表現」のことをいいます。

人には大きく三つの傾向があると言われています。一つ目は「アサーティブ」。これは、自分も相手も大切にしながら対話できる状態。二つ目は「ノンアサーティブ」。周りに合わせすぎて、自分の気持ちを抑え込んでしまう状態。そして三つ目が「アグレッシブ」。の気持ちを強く押し通して、相手を押さえつけてしまう状態です。

こどもたちはまだ、アグレッシブにこの世の中で生きることを試している段階。「どこまで私は肯定されるか」「これをやっても大丈夫だろうか」と、必死に主張している…そんな段階です。大人やお友達の気持ちを想像することも、今まさに経験の中で学んでいる最中なのです。だからこそわたしたち大人は、アグレッシブな対応（：「どうしてそんなことしたの！」と頭ごなしに正す）でもなく、ノンアサーティブな対応（：流されてすぐに対応する）でもなく、「今、この子はどんな気持ちなんだろう」「何を伝えようとしているのだろうか」と考えて、アサーティブな姿勢（：こどもをしっかりと肯定した上で、必要に応じて創意工夫しながら伝えていく）で向き合うことが大切です。このようなコミュニケーションが、善隣幼稚園の理想とする、潤いのあるコミュニケーションなのです。

今年度のテーマは『声』です。こどもたちの「まだ語られていないけれども語られようとしている『声』」、つまり“非言語的表現”としての“感情”に耳を傾けていきたいと思っています。感情はアナログなもので、それを受けて「こう対応すればよい」といった正解がある訳ではありません。でも、それをこどもの個性の中で発せられる言葉（言語）だと思って受け止めていくことが、正しいアサーティブな向き合い方であり、わたしたち大人にとって大切な姿勢です。

善隣幼稚園が目指す「いい子」とは、アサーティブな力をもったこどもたちのこと。大切にしたいのは、自分も周りも大切にできるこどもたちの育ちです。それは一朝一夕に成し遂げられるものではありませんが、これからもこどもたち一人ひとりの個性や感情に寄り添いながら、日々の小さな出来事を一緒に味わい、悩み、考え、育っていかれたらと思います。

（参考文献：『アサーション・トレーニング』 平木典子著）（2026.5）